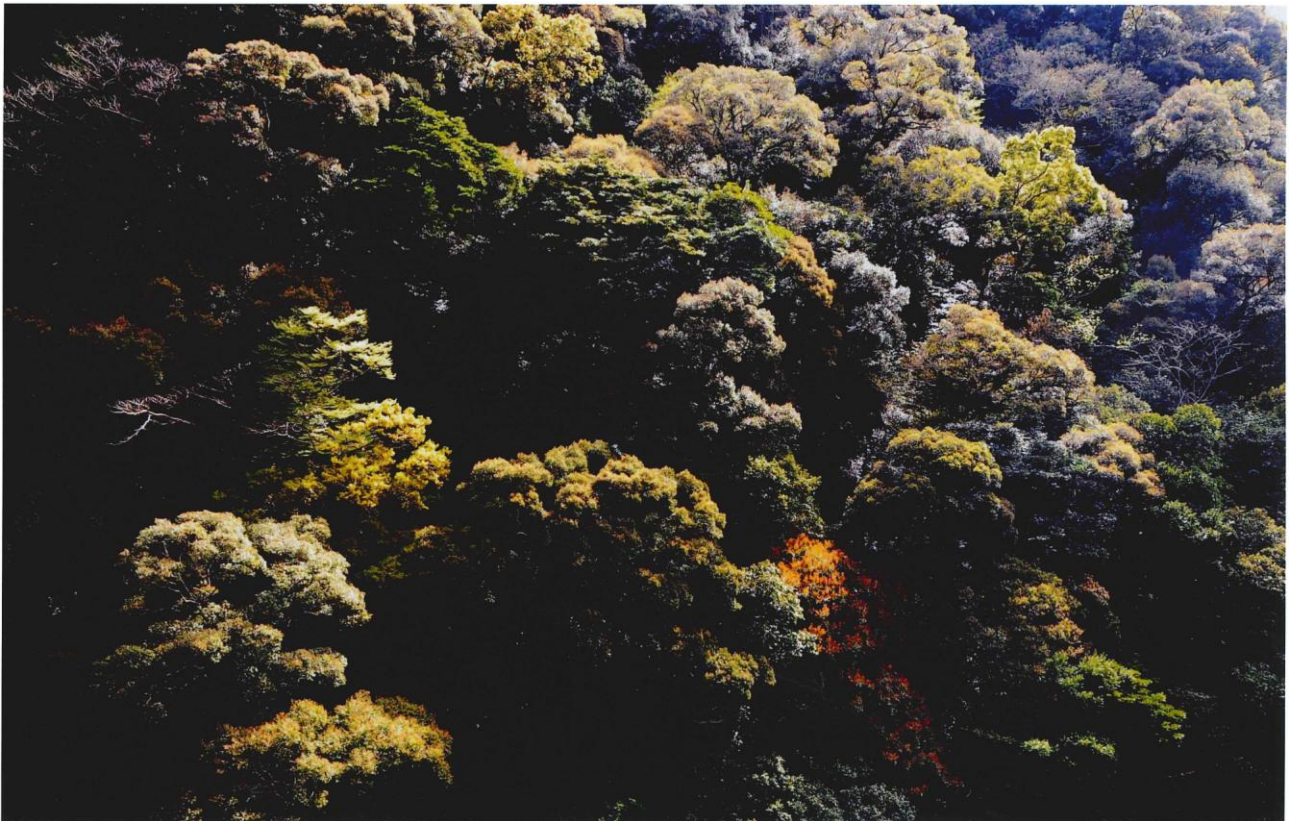


照葉樹林だより

ISSN 1880-8794

てるはの森の会 会報第 26 号

2011 年 3 月 20 日



早春の装い 3月になると綾の照葉樹林では、一本一本の樹木が競うように春の装いを見せ始めます。

(2010年3月下旬 綾南川溪谷にて撮影 坂元守雄)

《 目 次 》

- ☆ MAB 計画委員 綾町視察に同行して
- ☆ 遊歩道を復活させよう！！
- ☆ 森林の伐採は湿原の乾燥化を防げるか
- ☆ 綾の照葉樹林、冠雪。
- ☆ スプリング・エフェメラルの待つ森へ
- ☆ 事務局だより

発行：てるはの森の会

〒880-0014 宮崎県宮崎市鶴島 2 丁目 9-6

みやざき NPO ハウス 403 号

TEL 0985-35-7288 / FAX0985-35-7289

E-mail: teruha@miyazaki-catv.ne.jp

URL: <http://www.teruhanomori.com>

MAB 計画委員 綾町視察に同行して

会員 寺原捷夫

2010年10月26、27日にMAB計画委員3名が綾町を視察しました。その際に通訳を担当された、てるはの森の会会員の林裕美子さんの補助としてお手伝いをしました。短時間の綾町訪問の中で、MAB計画委員の方々にはかなり盛り沢山のスケジュールをこなしてもらいました。

視察の要点は2つあります。1つ目は、綾の照葉樹林プロジェクトの説明とその現場視察です。大森岳林道、綾の照葉大吊橋、照葉樹林文化館等を専門家の説明付きで視察して頂きました。2つ目は、照葉樹林と人との関係についてです。町づくりの取り組みを、地域づくりワークキンググループの歓迎会に始まり、ほんものセンター、早川農苑、綾の手袖染織工房の他、ネイチャーゲームを見学し、充分満足して頂けたと感じました。

ユネスコ BR 登録審査委員会のアナ・パーシク氏が再三言われたのは、綾の照葉樹林プロジェクトエリアに関わる全ての市町村との連携を密にする、ということです。この点は今後の登録審査の際に必ず説明を求められると思われまます。広島大学で学位を取られたホン・スーキー氏は日本語が堪能で、かつ韓国で生物圏保存地域 (BR) 登録の経験もあるとのこと。今後、綾町の BR 登録に協力して頂ければ大きな力になるでしょう。

今回の同行を通じて多くのことを感じました。時間の制約から照葉樹林は眺めるにとどまりましたが、もっと理解して頂く為には、森の中での視察・説明の時間を設けた方が良かったのではないのでしょうか。また、通訳の大変さをますます痛感した次第です。林裕美子さんご苦労様でした。今後国際化の波は避けられず、通訳や英語での説明が必要な機会がますます求められ、この点の強化が必要です。単に英会話が出来ただけでは役に立たず、英語の専門的な植物・生物学用語を短期間に学ぶのは至難の業です。また、綾の照葉樹林を中心にした綾町の発展の為には、綾町が BR に登録され「ユネスコエコパーク 綾」となることが、地道でふさわしいのではないかと感じました。

(てらはらとしお 綾町)



案内したルート図



※ 人間と生物圏 (MAB) 計画の一部に生物圏保存地域 (BR) が設立され、人間と生物の共生を目的とし活動しています。詳しくは照葉樹林だより第25号2ページをご参照ください。

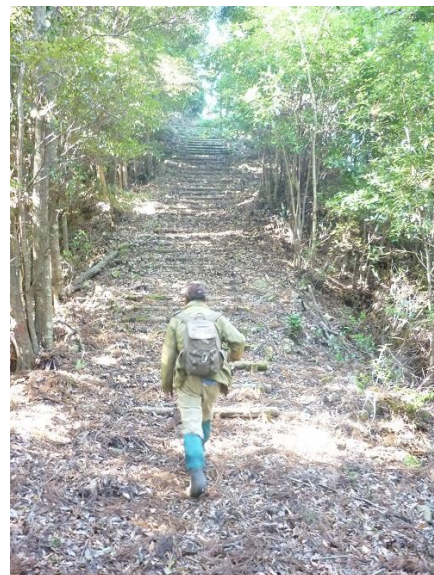
※ 視察に来られた MAB 計画委員 3 名：鈴木邦雄氏 (日本ユネスコ国内委員会主査：横浜国立大学学長)、Ana Persic (アナ・パーシク) 氏 (ユネスコ BR 登録審査委員会委員)、洪善基 (ホン・スーキー) 氏 (韓国木浦大学教授)

遊歩道を復活させよう！！

～大森岳から大吊橋までパノラマで一望できる展望スポット～

会員 大津留 司

綾南川以南にある県有林内には遊歩道があります。この遊歩道の魅力は、何といたっても照葉樹林の山並みの美しさ、そしてそれとは対照的な手入れの行き届いた杉の美しさ、落葉樹の美しさにあります。春になると、ヤマザクラも咲き、照葉樹林や杉の美林を一層引き立てています。春の新緑だけではなく、落葉樹が多くあることはこの遊歩道の大きな特徴です。モミジやコナラも新鮮に見え、秋を過ぎたころには足首まで枯れ葉で埋まってしまうほどに、落ち葉のじゅうたんが広がります。イイギリ、コナラの巨樹、モミジ、コブシ、桜、ヤブツバキなど、人が整備したものではありますが、天然の照葉樹林ではみられない自然を楽しませてくれます。



平成 19 年から県有林内を歩き始め、平成 22 年に歩き終わったころ、やっと宮崎県から地図が手に入りました。そして歩きつづいたその道が、地図によって結ばれました。その後、宮崎県によって板木林道や県有林遊歩道の整備が行われました。宮崎県は今後も県有林内の整備を続けて行くそうです。

遊歩道の重要性をトロッコ道の歴史から感じています。林業が盛んな頃、トロッコ道は奥山と町場を結ぶ重要な生活道でした。綾南ダムの建設時には新しく県道が建設され、トロッコ道は廃止となり、一部は九州自然遊歩道として活用されました。

綾の九州自然遊歩道は、国富から山を越えて綾川荘、杵道、上畑、綾の照葉大吊橋、川中、県有林遊歩道、広沢ダムの側を通って野尻へ抜けるよう設定されています。しかし、大吊橋付近で活用されたトロッコ道のうち現在歩けるのは、台風などによる崩壊により大吊橋遊歩道のみとなっています。今のところ復旧の予定はありません。

現在ユネスコエコパーク登録へ向けた動きが進行し、将来の世界遺産登録を目指す中、照葉樹林や遊歩道を地域住民が大切にしていけるためにも、遊歩道の復旧が期待されます。トロッコ道の復旧が難しいのであれば、古参道を迂回路として活用するなど、他の方法を考える必要があるのではないかと感じています。綾の照葉樹林を理解するには、今歩けない遊歩道を整備することが必要ではないでしょうか。ネームバリューや有機農業だけでなく、照葉樹林の恵みを綾町の人たちを含め多くの人に、身近に感じてもらいたいです。

山を登ることを表す言葉に「トレッキング」があります。「登頂にこだわらずに山の中を歩き回る」という意味です。県有林遊歩道は「トレッキングコース」として立派なものです。多くの人たちに、森林を愛し、この「トレッキングコース」を歩き、森の素晴らしさを知って欲しいと願っています。前町長は森を守り、有機農業の町を推進し、結の心を強調しました。それを、これからどう発展させるか。この「トレッキングコース」は、町の活性化を推し進めるものになるでしょう。

今はまだ未整備の綾町有林内にある遊歩道と県有林遊歩道が一体に整備され、素晴らしい「トレッキングコース」のある町として発展することを願っています。
(おおつるつかさ 宮崎市)

森林の伐採は湿原の乾燥化を防げるか

～神話と逆神話の狭間で～

東京大学愛知演習林 蔵治光一郎

兵庫県宝塚市に丸山湿原群という県内最大級の湧水湿原群がある。この湿原を囲む集水域の広葉樹林では自然植生遷移が進行しており、湿原に流入する水量を減少させていると推測されたため、湿原の遷移と乾燥化を防ぐ目的で2005年度に兵庫県による湿原周辺と集水域森林（里山林）の伐採が実施された。この伐採が湿原に流入する水量を増加させたかどうか、科学的に検証することを目的として、丸山湿原群保全の会がトヨタ自動車株式会社「トヨタ環境活動助成プログラム」の助成を受けて2009年1月から2010年6月まで実施した「丸山湿原群の科学的調査に基づく保全推進」プロジェクトの一部として森林水文学調査が行われた。調査プロジェクトの企画・コーディネイト・推進等の役割は中川芳江氏（株式会社ネイチャースケープ）が担い、私は専門的・学術的な協力者として参画した。集水域に森林を抱える湿原と集水域森林の間の水の関係を明らかにした森林水文学調査は、全国的にもほとんど前例がない。以下は、この森林水文学調査の報告書の総括部分からの抜粋である。



湿原生態系は、アクセスしやすい場所にあることが多いこと、湿原特有の希少な植物がみられること、何もしないで植生遷移作用に任せると乾燥化し、湿原でなくなっていく、そういった植物が姿を消すこと、などの理由により、早くから保全の対象として注目されてきた。乾燥化を遅らせるには、ある程度人の手を加えなければならないことは分かっていたが、具体的にどのような手の入れ方をすればよいのかを判断するには、科学的なデータが不足しており、科学的根拠が希薄なまま、試行錯誤が繰り返されてきた。湿原の水量や水位が減少傾向にあることが確認され、それによって湿原の乾燥化が加速しているような場合は、水量や水位の減少の原因を突き止め、それを取り除く必要がある。湿原の集水域に降った雨がいったん地下に浸透し、地下を流れて湿原に供給されている場合は、集水域の土地被覆状態（地表部および地下部）の最近の変化（例えば、人の手が入らな

くなったことによる樹木の成長など）と、湿原に供給される水量や水位との間に関係がある可能性が疑われる。

森林は常に人間にとって都合がよい働きをしてくれるという非科学的な思いこみ、神話は、世界中にみられるが、日本では最近まで特にその傾向が強かった。森林の作用（人間に無関係な自然界のメカニズム）と機能（人間にとって都合がよい作用）を区別せずに使ってきたことがその表れである。森林の作用はすべて機能であるという誤解が蔓延し、森林伐採は悪で、植林は善であるという宗教的ともいえる思いこみが幅を利かせていた。

過去100年間にわたる科学者の努力の結果、森林の作用はとて複雑であり、森林の働きのすべてが人間にとって都合がよい、というような単純な理解では到底、説明できないことが明らかにされてきた。森林の保水力には2種類あり、「緑の水」（蒸発して大気に戻る水）の保水力と「青の

水」(蒸発せずに川に流れる水)の保水力に区分される。森林は自ら生きていくために、数千年をかけて岩石を砕き、倒木や落ち葉を腐らせ、ミミズや昆虫の力を借りて、保水力の高い土壌を作っていくこと、降水量の季節変動、年々変動に備えるため、土壌の保水力に過剰性能が備わっていること、その過剰性能こそが「青の水」の保水力であり、人間にとって都合がよい機能であることが明らかになってきた。森林に水資源の涵養機能を期待するならば、土壌が成熟していると同時に、節水型の森林であることが必要となることもわかった。

このような科学的な理解は、科学者の間ではかなり浸透してきたが、一般の人々の間ではなかなか浸透しなかった。長い歴史を経て形作られた神話や思想の力は強く、人々は思いこみが強く、なかなか考えを変えられない。神話や思想を根拠として政策が形作られ、国や地方自治体の施策に組み入れられてきたことが、問題をさらにやっかいなものにした。それでも科学者の長年の努力により、近年では誤解を改め、科学的な理解に基づく政策も形成されるようになってきたが、神話を否定しようとするあまり、科学的データが不十分なまま、単にこれまでの神話を否定しただけの「逆神話」が形成される事例もみられる。例えば、木を切れば必ず水が増える、といった単純な「逆神話」の例が見られる。複雑な自然のメカニズムを過剰に単純化し、人々を思考停止状態にさせてしまうという意味では、神話も逆神話も同罪である。

本調査が行われた丸山湿原では、集水域を伐ることが湿原への水の供給量を増やすという「逆神話」があり、それを根拠とした政策に基づいて木が切られた場所において、雨量、水量、水位、水温、水質などを調査することが目的であった。本来、木を切るという破壊的な行為は、事前の十分な調査と、得られたデータの検証をもとに決断されるべき行為であるが、この事例では逆神話を根拠として、データがない状態で伐採が行われた。本調査は事後調査となり、伐採の影響を検出することは難しいことは最初からわかっていた。しかし調査の結果、いくつかの新しい情報が得られた。

例えば秋には伐採していない方の湿原で流出量の減少がみられたが、冬にはみられず、両方とも同じ量が流出していた。これは植生が落葉樹林であることと整合している結果である。また伐採していない方の湿原では、下流において水温の低い地下水の流入の可能性が認められた。これは森林伐採で制御できない流れの成分である。

一般論として、森林に水資源涵養機能を期待する場合、森林が節水型(緑の水の保水力が小さい)で土壌が豊かな(総保水力が大きいの)森が水源林として最も望ましい。そのためにはまず土を守ることが最も大事で、できるだけ踏み固めないことが大事である。木は積極的に切るが、運び出さずにそこに置いて自然に腐らせ、土づくりをする。水を消費しない森にするには、本数を思い切って減らし、成長のおそい木、老齢の木を残すのがよい。しかしこれらの一般論の適用には前提条件があり、前提条件を満たさない場所では対応も変わってくる。木を切らない方がいいという場合もあるし、切る場合でもどのような種類、大きさの木を選択的に切るのかは、ケースバイケースであろう。

本調査地で木を切ったことが湿原保全に寄与したか、しなかったか、確認は得られなかったが、重要なことは、何かをしようとする場合、事前に調査し、基礎データを前に協議して判断すべきであるということである。神話や逆神話に基づいて、データなしで破壊的な対応をすることは、予想と異なった結果が出た場合、取り返しがつかなくなること理解すべきである。現在の森林と水、湿原の関係を解明するための科学者の努力は、まだ始まったばかりであるが、少なくとも、単純な神話、逆神話だけですべてを解決できるはずがないということをはっきりしている。意思決定を神話や逆神話にゆだね、破壊的な対応を行うのではなく、非破壊的な対応から始め、順応的な管理を行っていくことが、複雑な仕組みの自然を相手にする際に必要な姿勢であり、作法であることを科学者として提言したい。

(くらじこういちろう 愛知県在住)



綾の照葉樹林、冠雪。

会員 小川 渉

霧島連山・新燃岳の大規模な噴火活動が始まって1ヶ月が過ぎた今、少し収まった感はありますが、いつでも激しい活動が再開する状況が続いています。綾は火口から直線距離で30km強、当初は相当の降灰があり生活への影響が見られました。特に農業者は大きな被害を受けています。照葉樹林の生態系への影響も心配です。今後、降灰が長期に続くことになれば、「綾の照葉樹林プロジェクト」の保護事業の一環として、土壌や水質の継続的なモニタリングが必要になるでしょう。



写真は降灰ならぬ降雪の風景です。2010年12月31日、大晦日に筆者が撮影したものです。朝から雪模様で、午前中は横なぐりの状態も見られました。きわめて珍しいことです。地の利を生かし、早速森へ。家から車で10分、大吊橋付近は写真(小)のように、見慣れた景色が一変していました。空は暗雲に覆われ、モノクロ写真になってしまいます。ようやくカラー写真が撮れたのは午後2時、かすかに青空がのぞき、手前の照葉樹の緑と純白の森のコントラストが浮かび上がりました。千載一遇、空前絶後のシャッターチャンスでした。

緑の照葉樹林の背後に白い山。写真で見た中国・雲南省の風景を彷彿させます^(注)。彼の地の山は6,000m級で、高山帯や岩峰が氷雪をまとったものですが、綾の場合は照葉樹林が丸ごと冠雪したものです。その意味で、地球レベルで唯一かつ一瞬だけの絶景だったと言えそうです。(おがわわたる 綾町)

(注) 麗江から望む玉龍雪山(5596m)が一例

スプリング・エフェメラルの待つ森へ

会員 古田栄子

麓は一面の菜の花畑が春を告げ、待望のアマナも開花したというのに、奥山では粉雪がちらついていました。ここは熊本県相良村にある球磨三山^(注)の一つで、迎鳥帽子（のけえぼし）山。頬にあたる風は凜として冷たいけれど清々しく感じられるのは、何ヶ月も関わってきたネイチャーゲームリーダー養成講座を終え、身軽になったせいかもしれません。平成8年から関わってきた講座も15年目。年1回の講座ですが何ヶ月も頭の片隅から離れず、無事に終わるまで申込やキャンセルに一喜一憂する落ち着いた日々を過ごしてきました。そのせいか、終わると無性に森を彷徨きたくなります。それまで拘束されていた電波とは無縁な奥山の森でなら、自分をリセットできそうな気がするからです。



福寿草



この時期、ささやかな労いも兼ねて車を走らせる早春の森には、スプリング・エフェメラルの一つ「春告げ草」の福寿草が待っています。スプリング・エフェメラルは春先に花をつけ葉を広げると、ほどなく地上から姿を消し、あとは地下で休眠する一連の草花の総称で「春の妖精」とか「春の儂いものたち」とも訳されます。木々が芽吹く前の短い間、春の陽光を精一杯受け止めて林床を彩る“春の妖精”たち。その儂さと潔さに惹かれ、必ず待っていてくれる花を想い描きながら今年も同じ山道を辿りました。一步一步森へと分け入れば、これまでの迷いや自己嫌悪の衣が一枚また一枚と脱がれ落ち、希望という早春の息吹を大きく吸い込むたびに元気になっていく実感。目的地には、雪解けの林床から顔を出したばかりの福寿草が開花していました。笑いかけるように輝く黄金色の花卉に時間を忘れて向き合いました。粉雪がやがて霰に変わり辺りが白くなりだすと、登山者たちは足早に下山していきました。一人残った私は降りしきる霰としばし遊び、真っ白になった登山道に靴跡をつけながらその森をあとにしました。視界から春告げ草が消えても黄金色の余韻が私を明るく包み、頬を叩く雪風にも笑える自分を取り戻していました。

(ふるたえいこ 新富町)



アマナ



ジロボウエンゴサク

(注) 球磨三山とは、市房山 (1721m)、白髪岳 (1417m)、迎鳥帽子 (のけえぼし) 山 (1302m) のこと

お知らせ

「国際照葉樹林サミット2011 in 綾」詳細決定！

- 時：2011年5月21日(土)、22日(日) ●場所：綾町高齢者研修センター
- 5/21(土)〈午前〉受付9:00～ 参加費500円(資料代)
 基調講演 10:30～
 (1)「世界の照葉樹林の現状とその保全の重要性」大澤雅彦氏(マラヤ大学教授)
 (2)「中国雲南省における照葉樹林帯」魯元学氏(中国科学院昆明植物研究所講師)
 〈午後〉13:00～
 分科会でのテーマ別討議
 (1)照葉樹林を活かした地域づくり(ユネスコエコパークと市民参加)
 (2)里山照葉樹林の恵みと危機～里山照葉樹林の持続的利用を考える～
 (3)照葉樹林・生活文化の発展的継承
 (4)体験分科会(親子で作る！木工教室)
 他、ポスターセッションや全体討議を行い、大会宣言を発表します。
- 5/23(日) 現地見学会9:00～14:00
 参加費1000円(バス代・保険代) 6コースに分かれて綾の森等を見学します。



※詳細やお申し込みは別紙のパンフレットをご覧ください。



事務局だより



◆ 「てるはの森の会」関連行事

- 1月 13日(木) 地域づくりワーキンググループ
 18日(火) 生涯学習講座「綾の照葉樹林(自然)を学ぶ」
 20日(木) 綾の照葉樹林プロジェクト 事業説明会
 21日(金) 第13回連携会議
 市民ボランティア林床調査
- 2月 3日(木) 地域づくりワーキンググループ
 15日(火) てるはの森の会 定例会
 18日(金) 連絡調整会議/サミット実行委員会
 24日(木) げんだぼの森補植
 28日(月) ふれあい調査 尾原地区
- 3月 1日(火) ふれあい調査 宮崎ミーティング
 4～6日 九州環境教育ミーティング
 15日(火) 生涯学習講座「綾の照葉樹林(自然)を学ぶ」
 // てるはの森の会 定例会
 17日(木) 連絡調整会議/サミット実行委員会
 19日(土) ガイドスキルアップ講座

◆ 平成22年度事業説明会(1月20日)と第13回連携会議(1月21日)開催！

事業説明会と連携会議で、平成22年度事業取組状況が報告されました。

説明会には寒い中、約100名の方が参加されました。中でも(財)日本自然保護協会が進めている「シスパ」という情報システムの紹介は、綾プロの将来がとても楽しみになるものでした。今後の動きが注目されます。

また連携会議では、綾町のユネスコエコパーク登録に向けて綾プロが協力していくことを確認しました。



シスパホームページ <http://sispa.nacsj.org/>

◆ げんだぼの森 補植しました♪

2月24日に、げんだぼの森に補植しました。手伝ってくれたのは、宮崎NPO等養成講座の受講生13名の皆さんです。1人約10本ずつ植え込みました。成長を見に、また訪れてくれるといいですね。ありがとうございました！

現在春の草刈り作業を行う予定です。実施時期は未定ですが、詳細が決まったらお知らせします。

協賛企業



オーデマ・ピザ財団
 世界自然遺産「オーデマ・ピザ財団」の
 設立10周年記念として、日本で初めて事業
 協賛する「てるはの森」に賛助しています。



会員募集中！

「てるはの森の会」では、綾の照葉樹林プロジェクトにご協力いただける会員を募集しております。

年会費

個人サポート会員	2000円
家族サポート会員	3000円
団体サポート会員	5000円
法人サポート会員	10000円

会員になっていただくと、照葉樹林やプロジェクトに関する情報を掲載した「照葉樹林だより」を年4回お届けします。プロジェクトが実施するイベントや各種行事に参加できます。詳細は事務局までお気軽にお問合せください。